

新潟大学災害・復興科学研究所
共同研究報告書

表題 前近代における雪害関連史料の収集と分析

研究代表者氏名 原田 和彦 1)
研究分担者氏名 片桐 昭彦 2)

1) 所属 長野市立博物館 2) 所属 新潟大学災害・復興科学研究所

研究要旨

2023年度は、これまでほとんど研究がなされてこなかった、江戸時代における雪害とはどのようなものであったのか、信越国境の村の古文書などから分析を行った。その結果、雪害とは公儀などからの救済が行われた雪を原因とする災害、具体的には、雪崩、早い時期の降雪、交通障害、木の雪折れ、大雪大雨による川欠け、雪代、家の倒壊、麦作雪腐れが雪害にあたりと位置付けた。

本年度はまだ十分に調査が回らなかった、群馬県と境界となる新潟県魚沼郡における雪害に
関係する史料を収集し分析する。また、山形県との県境となる岩船郡にも調査を広げる。
昨年のもデータとともに雪害関連の古文書を、エクセルを用いたベース化とし、23年度の情
報を更新する。その上で、再度雪害についての史料整理をし、雪害の分類を試みて、これまで
研究がほとんど行われてこなかった前近代における雪害について明らかにする。

A. 研究目的

本年度は、研究の前提作りとして雪害関連史料のデータベース化を進め、前近代における雪害に関する史料の収集と分析を行った。課題としては、

①前年度は信越国境のみに限定したが、新潟県と群馬県、山形県の境の村などに伝来する古文書に調査範囲を広げ、信越国境との違いを浮き彫りにする。また、対比する意味で、北陸地方（富山県、石川県、福井県）の史料も収集して参照する。

②飛越地震など、晩秋から春先にかけて、雪と関わりの在りそうな時期に発生した地震について、山崩れの有無などを確認し可能性を検討する。

③峠道を通行中に雪崩などに遭い生き埋めになった人について、近隣村から救出にあたっているが、これらはどのように処理されたのかこの点を明らかにしたい。

B. 研究方法

1. 史資料の探訪

本年度は雪害資料のデータベース化に重きを置くため、新潟県魚沼郡の古文書収蔵施設で資料の再訪を行う。具体的には、湯沢町史の編さんに使われた史料を再確認し新たな事実の発掘を試みる。また、群馬県側の史料にも注目しなければならぬので、群馬県立文書館にも史料調査に向かう。

また、山形県との境にある岩船郡の古文書所蔵施設、具体的には新発田市立歴史図書館や村上市の郷土博物館などを訪ねて、ここでも雪害に係る史料を収集する。また、山形県側の史料調査として、鶴岡市立図書館など庄内地方の史料、そして山形県の置賜地方については、米沢市立図書館へ史料の収集に向かう。

長野県、新潟県、山形県、群馬県の豪雪地帯の古文書は、国文学研究資料館にもいくらか収集さ

れているので、ここでの調査も行う。また、対比として、富山県・石川県・福井県の史料も参照する。

こうした史料の収集を年内進めることとする。

2. 史資料のデータベース化と分類（カテゴリーの作成）

年が明けて、雪害関係の史資料が集まった段階で、史料のデータベース化を進める。データベースの項目としては、雪害発生年月日、西暦、史料本文、雪害の種別、史料の出典、所蔵者、被災地、現在行政地名、とする。

データベースの結果を見て、ここから昨年度（23年度）に雪害と定義した事項について再確認を行い、雪害のカテゴリーをより明確化する。また、研究の目的で上げた3つの課題についてできる限り回答が出せるよう、史料を読み込む。

3. 研究会での報告

こうした研究は皆無に近いものがあるので、災害・復興科学研究所での報告の前に、他の歴史学関係の学会（信濃史学会）において報告し、意見をいただいたうえで、明文化して論文化したい。

4. 災害・復興科学研究所での報告

本年度の事業報告として、研究所での報告を行う。〇〇〇〇……………

C. 研究結果

（1）調査先として

群馬県立文書館 主に三国峠越え
埼玉県立文書館 主に御林の雪折れ
鶴岡市立図書館 主に鶴岡藩関係の史料
新発田市立歴史図書館 主に新発田藩
新潟県立文書館 魚沼地域の史料
弘前市立図書館 津軽家関係
国文学研究資料館 松代藩関係
金沢市立玉川図書館 加賀関係史料
富山県立文書館 飛越地震
長野県立歴史館 雪折れ、飛越地震

10か所で（50件ほど）調査した。

（2）史料収集のなかでわかったこと

①雪害に関する史料はほとんど残っていない

☞ 残す必要のない事案であった可能

性

②日常的な雪との関わりについて僅かながら残されている

☞ 特に豪雪地帯に見られる

③雪害としては、麦作雪腐と雪崩による人家や人への被害があった。

☞ 麦作雪腐は平坦地の積雪を想定するうえで重要（松代藩『勘定所元々日記』）

☞ 雪崩による人的被害については、三国峠と千国街道に確認ができる。

④雪と地震、洪水との関わりも確認される

☞ 特に1858年飛越地震における雪がもたらした被害（複合災害）が起こる

D. 考察

（1）城下町での雪への対応 ☞ 誰が雪をかくのか

○新発田藩（溝口家文書・新発田市立歴史図書館）

昨日 御申聞之御番所、木戸開閉之節、雪堀人足并道ふみ人足、前々之通村方々差出候様可申付旨、（後略）

雪が降って、城下の木戸が開閉できなくなったときは、雪堀と道フミについての人員は、前々のように村方から差し出すように

（2）松代藩・平坦地における大雪の指標

春の麦作についての指標が重要 ☞ 『勘定所元々日記』をすべて捲ったうえで感じる

①「去冬中大雪ニ而、当春中雪解之節麦作雪腐相成」（勘定所元々日記）文政6年4月）

☞ 冬に多くの積雪があった

②「去亥冬中不例薄雪、右ニ准寒中暖気、其上両度雷鳴大雨有之处、当春之儀者度々積雪」（『勘定所元々日記』文政11年2月25日）

☞ 南岸低気圧による雪

③「去冬中雪積薄御座候得共、当春雪明之節ニ至り度々雪積根腐・氷拔、其上春中不順に付」（『勘定所元々日記』寛政8年5月）

☞ 春になって長野県北部で積雪

（3）通行中に雪崩などに遭い生き埋めになった人について

この事例として、三国峠越の史料がある

群馬県立文書館「三国峠にて雪倒れの人、処理方につき廻章」

雪崩によって飛脚が死ぬ。携えていたものは、水原行きの手紙と旗であった。この所持品について、3か村で確認を行っている。「三ヶ村一同立合見届」「右ニ付、水原方返事次第三ヶ村方有様茂御苦難ニ茂預り」

E. 結論

これまで、雪と人との暮らしに関する史料を集めてきた。その中でも、より絞って
○三国峠、千国街道における雪崩被害とそれに対する支配層の対応を検討する。
○雪に伴う複合災害（地震、洪水）の分析を行う。
（岐阜県側の史料、富山県の史料は未見）
○1858年飛越地震については、積雪と地震という複合災害であるので、この事象は重要な問題である。

F. 研究発表

1. 論文発表（掲載誌名・巻号・頁・発行年を記入し、 掲載論文あるいはPDFファイルを別紙で1部提出）

（1）原田和彦「江戸時代における雪とのかかわり・試論―信越国境を中心として―」『長野市立博物館紀要』 第25号 2024年3月

（2）原田和彦「雪害研究事始」
『信濃』 第77巻 第1号 2025年1月

2. 学会発表（学会名・発表年月・開催地なども記入）

原田和彦 「前近代における長野県大北地域の地震活動」（歴史地震学会大会 2024年9月13日 長野県木曽町）